



桜井孝身の絵の世界 ●深野 治

4

絵の構造として、桜井の遠方へ伸びる箱型は、平面描写を三次元から四次元へみちびくパイロットの役をになっている。同時に、テーマに即しては、天空へ通じる回路であり、青年の未来に対する渇きの表象である。これは桜井絵画を理解する上で重要なキーワードとして記憶されなければならない。ダリのシュールレアリスムの遠近法が人間の虚無の地平線に向かってなだれ落ちていくのに対し、桜井の箱型回路は人間存在の基底を汎神論的解放へ導いていくベクトルを秘めている。この時期に、桜井は自らの思想の方向を確証していたとはいえない。おそらく無意識のうちに精神の内部で育んでいた胚芽が、寂寥の主題の奥でかすかに響き始めていたのであろう。

一九六四年、桜井はサンフランシスコへ旅立った。この時期、彼は疲労の極に達していたように私には感じられる。九年前(一九五五年) 二十七歳で九州派を結成、アンフォルメル旋風の吹きすさむ只中を突っきった運動にエネルギー衰弱の亀裂が生じ、長い友人関係にも得体の知れないわだかまりが渦巻いていることが傍から察せられた。この亀裂が何であったかは桜井の個人史の上でも、九州派の運動史でも重要な意味を持っていると考えられるが、いまここでは私が桜井に感じた疲労の深さをいうにとどめよう。

桜井は、前衛美術運動の総体的挫折からの回復を求めるように、旅に出た。

そして、サンフランシスコのビートニク思想に出会う。アレン・ギンズバークを初めとする詩人たちとの交流、何にもまして人種のルツボのアメリカの底辺で体験した人間の奥行の深さ、生命の根源に対する信仰の強烈さを感じ取った。

桜井の絵は徐々に変貌を開始する。部厚く多彩に塗り重ねた画面に鋭くナイフが走り、目が大きく、頬に深い切れ込みの入った女性像が現れてくる。